

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00507

研究課題名（和文）台湾文学の多言語性と多文化性に関する考察

研究課題名（英文）A Study of Multilingualism and Multiculturalism in Taiwanese Literature

研究代表者

李 郁恵（Lee, Yuhui）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授

研究者番号：80399071

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：台湾では、公用語とされている中国語のほか、方言や日本語などさまざまな言語が日常生活の中で使用されている。文学の世界においてもそれが反映され、多元性が展開されていると思われるが、しかし戦後から続いてきた単一言語主義の状況は、いとも簡単に打開できるものではない。中国語以外の言語作品は、書き手も読み手も限られている中、どのような形で模索されようとしているのか。また、使用言語を問わず、多文化が交差するその様相がどのように表現されているのか。本研究は台湾文学への学術的関心が高まっている動きの内側で、その大きな特色として打ち出されている多言語・多文化共生の可能性と限界を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1997年アカデミックで市民権を獲得してから20年の間、台湾文学は歴史的に形成されてきた多言語・多文化的土壌を強みに開花しようとしていることで脚光を集めている。しかし、その可能性がクローズアップされることはあっても、その限界について客観的な視点から指摘されることはあまりなかった。ちょうど大きな節目に当たる今、これまでの経過を振り返り、将来を展望する良い時期だと考え、本研究に取り組むことにした。そして、研究期間を通して、言語構成と表現内容という2つのパースペクティブから台湾文学作品に含まれる多言語性と多文化性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In Taiwan, in addition to Chinese, which is the official language, various languages such as dialects and Japanese are used in daily life. This is reflected in the literary world as well, and it is thought that pluralism is being developed, but the situation of monolingualism that has persisted since the end of the war is not something that can be broken easily. Given the limited number of writers and readers, how are works in languages other than Chinese being explored? Also, regardless of the language used, how is the aspect of multicultural intersection expressed? This research clarifies the possibilities and limitations of multilingual and multicultural coexistence, which is one of the major features of the growing academic interest in Taiwanese literature.

研究分野：文学一般

キーワード：台湾文学 多言語 多文化

## 1. 研究開始当初の背景

台湾文学が1つの独立した学問分野として認められたのはここ20年あまりのことである。それまでは、中国文学というカテゴリーに括られており、しかもその中でどちらかという周縁部に位置していた。この状況は、日本はもとより、本場の台湾でも同じであった。戦後日本から政権を接収した中華民国政府の主導で中華ナショナリズムが展開され、文学に限らず、およそ文化、思想の主流は常に「中国」によって占められていた。「台湾」はあくまで亜流、副次的な扱いしかされなかった。

ところが、1990年代以降郷土意識が台頭するにつれ、台湾文学は表舞台に浮上するようになった。大学では1997年、大学院では2000年から関連教育研究機関の設置が相次ぎ、2017年度現在、直接台湾文学の名称を冠する大学院は8ヶ所、学科は3か所ある。そのほか、台湾文化や台湾語文など近いネーミングを使用する大学院は7か所、学部は6か所数えられるほど、今まさに確立に向かっている最中といえる。

こうした背景に加え、これまで外来統治者による異質性の排除が繰り返されてきた歴史への反省を併せて、台湾文学最大の特色は何といても多言語・多文化を掲げることである。使用人口が70%以上と最も多い台湾語(ホーロー語)をはじめ、それに次ぐ10%程度の客家語、認定された16の民族を合わせても3%未満の原住民諸語、さらに日本統治時代の50年間国語だった日本語まで復権を果たし、いずれも中国語と肩を並べることができた。

上記8つの大学院で2016年度までに提出された合計847本の学位論文に対し、筆者は独自の調査を行い、次のような結果を得た。まず、戦後を対象とした648本に絞れば、テーマとして中国語以外の言語作品を直接取り上げ、もしくは当該言語を使うエスニック・グループに注目した論文数は173本(26.7%)を占めている。その内訳では台湾語93本(14.4%)、客家語17本(2.6%)、原住民諸語49本(7.6%)、日本語5本(0.7%)、東南アジア諸語を含むその他9本(1.4%)となっている。

一方、言語状況が著しく異なる日本統治時代及びそれ以前の199本については、日本語113本(56.8%)、漢文68本(34.2%)、白話文9本(4.5%)、台湾語9本(4.5%)である。戦後の数字と合わせてみると、台湾文学の使用言語として中国語以外の言語に対する注目度は、日本語が最も高いと推定される。日常生活で最もよく使用されている台湾語が2位であるのは当然として、母語話者の少ない原住民諸語が客家語を凌いで3位につけているという結果が興味深い。

しかしながら、戦後から実施されてきた中国語一元化政策による影響は根強いものがある。外国語となった日本語はともかくとして、台湾語、客家語、原住民諸語といった在来の言語も学校やマスメディアなど公共の場から追放され、次世代への伝承が危ぶまれている。1990年代からようやく開始され、2001年正式に義務化された母語教育は徐々に根を下ろしつつあるものの、読み書きよりも会話が重視される傾向にある。また、言語によっては正書法が浸透どころか、確立さえしていないものもあることから、中国語以外の言語作品は果たしてどのぐらいの作者と読者を擁しているかが不明である。つまり、上述した学術的関心度では語りきれない問題点が多く存在し、それを把握しない限り、多言語・多文化共生が単なる抽象的なコンセプトにとどまってしまうだろう。

## 2. 研究の目的

以上の問題意識に基づき、本研究は言語構成と表現内容と二つのパースペクティブから台湾文学の現状と課題について考察することを目的とする。

## 3. 研究の方法

研究の目標及びその達成に向けた方法は下記のとおりである。

目標 : 多言語性を究明する。

方法 : 台湾文学の言語構成を把握する。

内容 : 中国語以外の言語作品の出版状況を調査すると同時に、中国語以外の言語作品の表記方法を確認する。

目標 : 多文化性を究明する。

方法 : 作品における多文化表象を分析する。

内容 : 使用言語を問わず、代表的な作品を通読する。その中から、言語文化が交差する様相を抽出し、歴史的、社会的背景を考察する。

## 4. 研究成果

研究成果については、年度に分けて説明すると次のとおりである。

2018年度

初年度にあたる2018年度は、計画どおりに台湾文学の言語構成を把握すべく、図書や雑誌など中国語以外の言語作品の調査とその収集を行った。と同時に、先行研究を参考にしながら台湾社会における多言語、多文化の問題点を次のように洗い出した。

まず、中国語以外の言語教育の実施状況については、1990年代以降郷土教育思潮の一環として台湾語や客家語、原住民諸母の母語教育が組み込まれているが、どの言語においても発音記号や文字表記に関して統一した見解が得られず、各教育機関の決定に委ねられている。また、学習時間も週に1コマと限られており、結果的に読み書き能力どころか、オーラルコミュニケーション能力の養成さえも難しいのが現状である。

一方、台湾の多文化状況は各エスニックの間が平等な関係を保つ「多文化主義」型というよりも、圧倒的なマジョリティとそれ以外の複数のマイノリティが存在するいわゆる「文化的多元主義」型に近いものがある。これらは一くりにされて中華という従来の支配的な文化と相対するとき、マジョリティとマイノリティの間のバランスをどう取るべきか、また、台湾というナショナル・アイデンティティにどうつながっていくかなどの課題が浮上する。

以上の問題に注目しつつ、次年度以降は文学作品における多言語、多文化の表象分析に取り組んでいきたい。なお、その目標に向けた一つの試みとして、今年度は戦前及び戦後初期の日本語作品をテキストにファッション文化、特にチャイナドレスの受容に関する考察を発表した。2018年10月21日「東アジアと同時代日本語文学フォーラム第6回上海大会」での口頭発表を経て、2019年3月に『アジア社会研究』第20号(1-24頁)に掲載されている。

#### 2019年度

第2年度にあたる2019年度は、計画どおりに台湾文学作品における多言語性の問題に取り組んだ。分析の対象は、台湾国内外で華々しい受賞歴を持つ作家呉明益が2015年に発表した『自転車泥棒』である。この作品は、戦前、戦中、戦後と激動の時代を生き抜いた人々の記憶を交錯させながら台湾の近現代史を描いている。主要言語である中国語を含め、計8種類の言語が使用、言及されていることに注目し、長期にわたる単一言語主義から解放された最新の状況を考察することにした。

まず、言語の表記方法を検討した結果、発音や意味が中国語に変換されるものもあるが、台湾語やツォウ語、日本語、英語はいずれもアルファベットや仮名、漢字など原語のまま挿入されていることが分かった。一方、なぜそんなに多くの言語を取り入れたかについては、二言語併用者の存在をほのめかすためではないかという結論に至った。ここでいう併用とは、複数の言語を別々に操るというよりも、むしろ片方はメインで片方は片言だけでも混じり合っただけということを指す。この点から本作に映し出された台湾という多言語空間は言語同士が鮮明な境界線を持たず、多言語の解放を匂わせる興味深いものだといえる。

次に注目したのは、物語の主軸となる自転車をめぐる多様な呼称である。分析により、戦前世代には日本語、台湾語母語話者には台湾語、戦後世代には中国語、年齢や言語の属性によって異なる言語の呼称が混在していることが明らかになった。また、その中から日本語、台湾語から中国語へとといった時系列的変化が読み取れた。こうした細かい設定を生み出す背景には、戦前と戦後における二つの「国語」の入れ替わりと、戦後「国語運動」の中における「方言」の排除がある。つまり、その不統一さと変化の目まぐるしさが、言語同士のせめぎ合いを浮き彫りにし、これまでの言語の抑圧を物語るために意図的に仕組まれたものと考えられる。

#### 2020年度

第3年度にあたる2020年度以降は、台湾文学における中国語以外の言語による出版状況などについて現地調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により実施することができなかった。そのかわりに、日本からでもアクセスできる図書館のウェブサイトを通して文献調査に取り組んだ。調査結果として、まず実際中国語以外の言語で書かれ、出版されたものがまだ少ないことが分かった。1991年から創刊された『台文通訊』と1996年から創刊された『台文BONG報』が2012年合併する『台文通訊 BONG報』や、台文戦線雑誌社が2005年から刊行した『台文戦線』などのように台湾語による雑誌はあるが、読者が限られており、普及するまでには至っていない。一方、日本語の部分は、1980年代から個人の記念や私家版として刊行されたものがある。その一例として、『台湾万葉集』や『台湾歳時記』などが挙げられるが、これらも日本語教育を受けた戦前世代や台湾在住の日本人が中心となる短歌会や俳句会の同人誌的性格の強いものと言わざるを得ない。

#### 2021-22年度

なお、延長した2021及び2022年度も新型コロナウイルス感染症の影響により現地調査を実施することができなかったため、オンラインや図書館の文献複写サービスなどを通じて文献の収集及び整理に努めた。成果として、1945年終戦直後の台湾で刊行された新聞や雑誌には、台湾人作家が書いた日本語作品の中国語訳や、中国人作家が書いた中国語作品の日本語訳が多数掲載、紹介されていたことが分かった。このことから、中国語一元化が本格的に進められる前に、台湾の文壇は少なくとも日本語と中国語という二つの言語が共存していたことがいえる。しかし、1946年10月25日に中国語の普及を妨げるという理由から政府公報や中国国民党発行の『中華日報』などでは日本語使用が廃止され、日本語が次第に公の場から退けられることとなった。戦前の日本語作品に対する翻訳が再びブームを迎える1970年代末まで、台湾文学のうちに秘める多言語性が不問に付されるままだった。

以上一連の流れを把握するための研究ノート作成に取り組みながら、本課題の延長線で文学における多言語使用の問題を引き続き考えるための課題を構想してみた。その準備作業として、2021年10月に東アジアと同時代日本語文学フォーラム、12月に韓国日語日文学会でオンライ

ンによる口頭発表を試みた。いずれも日本語文学における異言語接触、及び多言語表現を論じるものであった。一方、多文化性に関連することから、植民地統治下という非対称関係にある文化の衝突を描く湯浅克衛の『棗』について分析した論文は、韓国日語日文学会誌『日語日文学研究』第 119 輯（241-262 頁）に掲載されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 李郁蕙	4. 巻 119
2. 論文標題 逆転された力関係 湯浅克衛「棗」試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日語日文学研究	6. 最初と最後の頁 241-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17003/jllak.2021.119.241	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李郁蕙	4. 巻 21
2. 論文標題 『自転車泥棒』における多言語的エクリチュール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/49057	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李郁蕙	4. 巻 20
2. 論文標題 長衫から旗袍へ 1940年代の台湾文学におけるチャイナドレスの表象	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/47470	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 5件）

1. 発表者名 李郁蕙
2. 発表標題 日本語文学における異言語接触 井伏鱒二『花の町』に描かれる「南洋」
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム第9回オンライン大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 李郁蕙
2. 発表標題 日本語文学における多言語表現
3. 学会等名 2021年度韓国語日文学会冬季国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 李郁蕙
2. 発表標題 『台湾文芸』と『文学台湾』における日本文学関連論述
3. 学会等名 日中比較文学研究オンライン会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李郁蕙
2. 発表標題 湯浅克衛「棗」における家の構造
3. 学会等名 2020年度韓国語日文学会冬季国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李郁蕙
2. 発表標題 台湾文学における多言語的エクリチュール
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム第7回台北大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李郁蕙
2. 発表標題 文学から見る1940年代の台湾におけるファッションの表象
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語文学フォーラム第6回上海大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------